

令和元年6月21日現在

機関番号：31604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16943

研究課題名(和文) 図像・碑文資料と考古遺物の比較による古代エジプトの供物奉獻儀礼の研究

研究課題名(英文) A study of the offering rituals in the Ancient Egypt: a comparison of pictorial, textual and archaeological evidences

研究代表者

矢澤 健 (Yazawa, Ken)

東日本国際大学・エジプト考古学研究所・客員准教授

研究者番号：10454191

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：神々や死者に供物を捧げる行為は古代エジプト人にとって重要であり、神殿や墓の壁画、パピルス文書などの図像・文字資料は当時の供物に関する詳細な情報が記録されている。しかし、実際に供物をどのように捧げていたのかについては不明な点が多い。本研究は、供物奉獻の祭祀で供物の代替物として利用されたと推測されているミニチュア土器に着目した。ミニチュア土器には質に大きな違いがあるが、その形状や組み合わせには一定の規則性が見られ、供物奉獻祭祀の典礼「供物リスト」の内容を意識したものである可能性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ミニチュア土器は無造作に捨てられた膨大な量の集積となっており発見されることが多く、墓の内部であっても後世の盗掘や攪乱の影響で本来どのように使われていたのかが分かりにくい。考古学的分析を駆使してその規則性を見出し、図像・碑文資料と対応させることで、これらのミニチュア土器が供物奉獻の典礼に基づいて使用されていたことを指摘した点で、高い学術的意義があったと考えられる。実物を模倣した呪物を用いた儀礼は世界各地で認められ、古代エジプトだけでなく、こうした儀礼行為の背景となる人間の思考の特質への理解にもつながるものとして、本研究は社会的意義があると言える。

研究成果の概要(英文)：As demonstrated by the fact that a large area of temple and tomb architectures were dedicated to scenes and inscriptions for votive offerings, offering to the gods and deceased was indispensable to the ancient Egyptians. Although pictorial and textual evidences are fruitful sources of information on a content, number and sequence of the offering ritual, there still remain many unanswered questions regarding actual ritual activities performed in a tomb or a temple sanctuary. The present study focused on miniature pottery, which is often attested in temples and tombs in large quantities and assumed to be used as a substitute for real food and drink offerings. Even though miniature pottery vessels varies widely in quality, the present study shows that a group of miniature pottery for a single offering ritual was decided in accordance with the offering liturgy, called 'offering list' in Egyptology.

研究分野：エジプト考古学

キーワード：古代エジプト 供物 中王国時代 ミニチュア土器 供物リスト 儀礼 宗教考古学

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

古代エジプトにおいて、神々や死者に供物を捧げる行為は、世界の秩序を保つために、死者が来世で生き続けるために不可欠なものであり、神殿や墓の壁画・碑文には神や死者に対する食物・飲物や香の供物が描かれていた。これらの図像・文字資料は当時の供物について詳細な情報を提供してくれるが、実際に供物をどのように捧げていたのかについては不明な点が多い。

研究代表者は、中王国時代の供物奉獻祭祀に関連する遺構から発見されたミニチュア土器に着目した。供物奉獻祭祀では必ずしも実物の供物を用いて行われたわけではなく、ミニチュア土器が供物の代替物として機能していた可能性が指摘されていた。研究代表者は過去の研究(矢澤 2014)で、ミニチュア土器が「単位」と呼べるような一定の器形・数の組み合わせに基づいて使用されていた可能性を示した。このような「単位」の存在は供物奉獻の典礼と関連している可能性があり、図像・碑文資料にある供物奉獻の儀礼とミニチュア土器を比較することで、土器を用いた祭祀の背景を明らかにできると推測された。

### 2. 研究の目的

ミニチュア土器を用いた供物奉獻に関連する遺構・遺物の考古学的分析によって、土器の形状や組み合わせ、およびその通時的変遷や地理的拡がりを含めた全体像を明らかにし、供物奉獻祭祀に関する図像、碑文資料と比較することで、ミニチュア土器を使用した祭祀の実態と、その儀礼的背景を明らかにすることが目的である。

### 3. 研究の方法

#### (1) ミニチュア土器の形状や組成の変遷過程と地域差の検討

中王国時代にミニチュア土器による供物奉獻が認められる遺構として、墓(地下の副葬品と地上での葬祭)、神殿、ファウンデーション・デポジットなどが挙げられる。これらの遺構で使用された土器の形状や組み合わせについて調べ、その通時的変遷や地域差について検討し、全体像を把握する。

#### (2) 図像・碑文資料とミニチュア土器との比較

供物奉獻祭祀に関する図像・碑文資料は多数あり、特に神殿や墓、棺の側板などに表形式で書かれた目録「供物リスト」には供物の名前と数、時にはそれを収める容器の形と色までが記載されている。供物容器に関する図像・碑文資料と、供物奉獻で使用された土器との関係を見ていくことで、ミニチュア土器を用いた供物奉獻の実態とその儀礼的背景について考察する。

### 4. 研究成果

#### (1) ミニチュアの供物容器の変遷過程と地域的広がり

供物奉獻に関連するミニチュア土器の組み合わせが最も良好な形で保存されているのはファウンデーション・デポジット(定礎具)であり、これについては研究代表者が過去に分析を実施し、その変遷過程を示した(矢澤 2013)。しかし、ファウンデーション・デポジットが残された遺構の大部分は王に関連する建物であり、数も限定され、当時の供物容器を用いた活動の全体像が描きにくいという問題があった。これに対して墓の供物容器は、多くが盗掘を受けて本来の組成は分かりにくくなっているものの、資料数が多く、通時的変遷や地理的差異、階層による違いをより詳細に検討できると予測された。そのため、中王国時代の墓に収められたミニチュア土器の通時的変遷と地域的な広がりについて、既存の報告書の資料と研究期間中にダハシュール北遺跡の発掘によって取得した新資料によって検討を行った。

中王国時代の最初期、すなわち第 11 王朝メンチュヘテプ 2 世治世以降にはミニチュア土器を副葬する行為が認められ、最末期の第 13 王朝中期まで続いていた。皿形あるいは碗形の開口器形の土器は時代によって大きな変化はなく、それ以外の土器は時代によってバリエーションがあるものの、第 12 王朝中期以降には大きな変化がないことがわかった。

墓のミニチュア土器の分布は、当時の支配層の本拠地と概ね合致することが明らかになった。即ち、第 11 王朝ではテーベ地域でミニチュア土器の副葬が認められ、イチ・タウイの造営に伴い国の中心がメンフィス・ファイユーム地域へ移行すると、同地域のサッカラ、ダハシュール、ラフーン、ハワラ、ハラガなどピラミッドの周囲にある王族・高官墓やその近傍の墓地でミニチュア土器が頻繁に見られるようになる。そして第 13 王朝に中心が再び南部のテーベに移ると、ミニチュア土器の副葬がテーベで見られるようになった。ミニチュア土器副葬の分布は当時の支配層の墓地とともにあり、エリート層の葬送儀礼においてミニチュア土器の副葬が極めて重要であった事実を示していると考えられる。支配層が墓を作った地域以外でミニチュア土器はほとんど発見されないため、同時代の地域差は見られない。したがって、ミニチュア土器の変遷と分布の分析から、その構成の斉一的な傾向が強調された。

なお、この結果は中王国時代末期の王朝交替プロセスの研究にも望外の成果をもたらした。古代エジプトの第 2 中間期では、「ヒクソス」と呼ばれるアジア地域からの移住民の勢力拡大に伴って、第 13 王朝中期頃に北のメンフィス・ファイユーム地域から南のテーベに支配層が移動し、それが第 17 王朝に繋がっていくというのが旧来の説だった。一方で、第 17 王朝の王統は第 13 王朝と連続しておらず、テーベの在地の支配者が王を名乗ったものである、という説が近年提出されていた。これに対して研究代表者は墓の副葬品からこの連続性を考古学的に検討した。その

結果、第 13 王朝中期頃のメンフィス・ファイユーム地域の副葬品とテーベの副葬品が類似しており、少なくとも物質文化の面では支配層の移行の可能性を排除する結果ではないことを明らかにした。上述の研究からミニチュア土器と支配層の関係は中王国時代を通じて認められるものであり、第 13 王朝中期頃にミニチュア土器を伴う墓がテーベで増えていることも、支配層の移行を裏付ける結果となった（下記の「5. 主な発表論文等」学会発表）。

## (2) 供物容器の図像と精製土器、粗製土器との関係

研究代表者は、前述の「供物リスト」に記載された供物の数と、観察可能なミニチュア土器の「単位」の数の比較を過去に予察として行っており、Winfried Barta による分類（Barta 1963）の Type C の供物リストが「単位」の数と最もよく合致することを指摘した（矢澤 2014）。Type C の供物リストは中王国時代から見られ、この「単位」は Barta の Type C を基に構成されていた可能性を研究代表者は指摘したが、本研究期間における図像・碑文資料の検討では、この可能性を排除するような新たな知見は得られなかった。

一方、一口にミニチュア土器といっても質は様々であり、図像・碑文資料と考古遺物との比較においても、こうした質の違いをどう考慮すれば良いのかが問題と考えられた。中王国時代の王族・高官の墓では、赤色磨研の精製土器など、主に埋葬のための特別な土器が散見される。これらは供物の容器として、あるいは供物を象徴するものとしてしばしば被葬者の近くに配置された。一方で王の葬祭殿では、ミニチュア土器を主とする粗製の土器が供物の奉獻で使用された。粗製の土器は「使い捨て」であり、礼拝施設で死者に対する祭祀が行われる度に付近に廃棄されたため、大量の土器の堆積となって発見される。これら地下の副葬土器と地上の「使い捨て」の土器は精粗の差が強調されがちだが、どちらも供物奉獻に関連している点では共通している。精製・粗製土器の関係について、研究代表者が発掘・整理に携わったアブ・シール南丘陵遺跡の資料を用いて具体的な検討を行った。

アブ・シール丘陵の南東斜面では階段ピラミッドと同じ築造技術で造られた石積み遺構が出土しており、その背後の斜面からこの遺構に付随すると考えられる岩窟の地下施設が発見された。岩窟の入口は斜面中腹から掘削された竪穴であり、竪穴の東西に部屋が作られていた。内部からは女神像をはじめとする、陶製、土製、木製の像とともに、ピラミッド・ウェアと呼ばれる赤色磨研の精製土器が発見された。ピラミッド・ウェアは王族の墓で良く見られる土器で、古王国時代に墓に副葬された供物容器を模倣したものと考えられており、ピラミッド・テキストや供物リストとの関連が示されている（Allen 2012）。原型となるものを模倣して縮小したものをミニチュアと定義するならば、ピラミッド・ウェアもまたミニチュア土器の一種と言える。また石積み遺構の南側からは、中王国時代に年代付けられる大量の粗製土器の集積が出土した。この土器の集積は、女神に対して定期的に供物を捧げる儀式が執り行われ、使用されたミニチュア土器が廃棄され続けた結果、形成されたと推測されている。岩窟遺構内に人の埋葬の痕跡はないものの、埋葬に特徴的な精製土器が中に収められ、岩窟遺構外の近傍に供物奉獻祭祀に伴う粗製土器の廃棄跡があるという構成は、墓に見られる地下の副葬土器と地上の葬祭活動に由来する廃棄跡という組み合わせと、構造的に類似している。これを踏まえ、本研究では岩窟遺構と土器集積の両者の土器の関係について検討した。なお、岩窟遺構の土器は墓と同じく一回性のものと考えられるが、土器集積は一定期間繰り返し行われた儀式の結果であり、少なく見積もっても 100 年は続いていたと推測される。そのため比較においては、土器集積の通時的な変化についても考慮した。土器集積は分層できなかつたが、発掘では深さ 10cm ごとに取り上げが行われており、各 10cm の構成を確認したところ大きな攪乱はなく、下部から上部に向かって徐々に堆積していった様子が観察されている。土器集積の最下レベルと、最上レベルの各 10cm の構成を抽出し、別個に器形組成を提示した。

岩窟遺構内部の土器と土器集積の最下レベル、最上レベルで発見された器形の比較を図 1 に掲載した。分析の詳細は下記の「5. 主な発表論文等」雑誌論文に

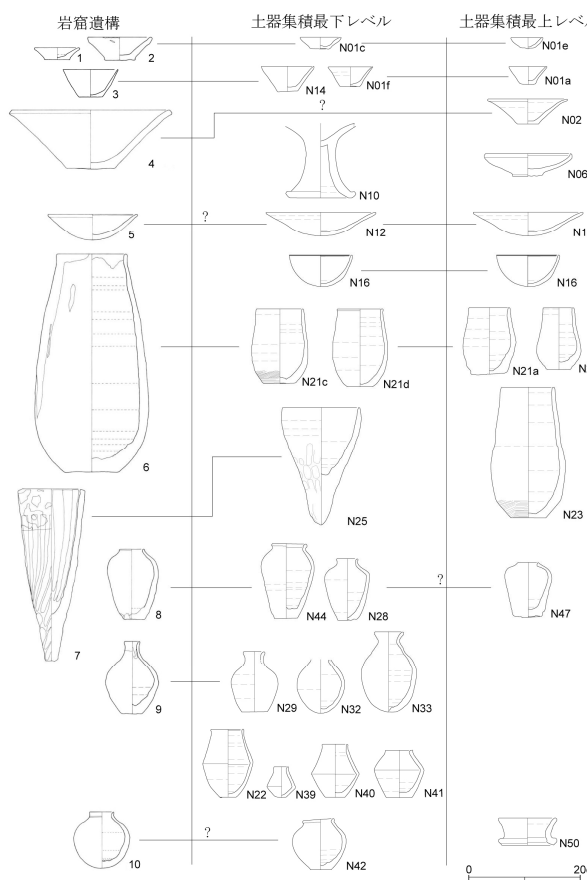
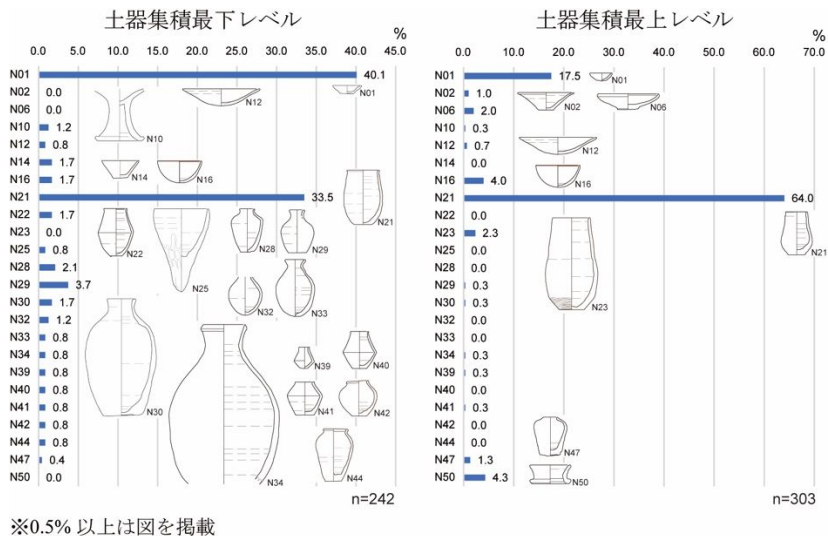


図 1 岩窟遺構と土器集積の出土土器の比較

記載してあるが、全体的に見て土器集積の器形組成は、完全ではないにしても岩窟遺構の土器群と共通する要素が少なからずあり、集積の最下レベル(最古段階)では特にその傾向が顕著であることが分かった。

一方、最上レベル(最新段階)では土器の器種が明らかに減少しており、これは定量的な分析でも確かめられた(図2)。



※0.5%以上は図を掲載

図2 土器集積の最下レベルと最上レベルの器形組成の比較

また、大部分を占めるミニチュアの平底碗形とピーカー形の器形の通時的変化に着目すると、器壁の厚さや細部の作り、光沢などの表面の質感、目に触れられることが少ない底面の調整などの要素は徐々に整形が簡略化され、サイズも小型化していたことが分かった。ただし、儀礼的に重要だったと考えられる外見上の特徴、つまり大まかな輪郭と表面の赤彩という要素は残り続けていた。これらの碗形、ピーカー形の土器にはおそらく、供物奉獻の典礼にまつわる「祖」となる型があったと推測される。例えば碗形では、「祖」の概念が最もよく反映されていたものが岩窟に納められたピラミッド・ウェア(図1-3)である。土器の集積最下層で取り上げられた同種の土器(図3-N14)は同じ外観を有するが、整形、調整は比較的粗く、最上層になるとさらに小型化・粗製化が進む(図3-N01a)。地上で行われた祭祀では、当初は「祖型」に近い土器が生産されていたが、徐々に「祖型」を表象する上で相対的に重要でない要素は省かれていったと考えられる。

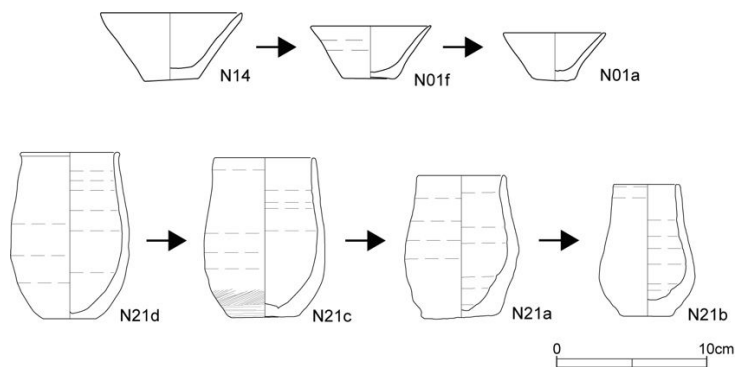


図3 ミニチュア土器の粗製化と小型化

粗製土器を使った祭祀はアブ・シール南丘陵遺跡だけでなく、この地域の神殿や墓での供物奉獻でも使用され、祭祀用の土器を供給していた工房は大量に生産することが求められていたと推測される。土器集積を産んだ活動の期間には当然土器職人の世代交代が複数回に渡っており、大量生産という条件下で次世代にコピーされていったことが、この変化に影響していたと考えられる。

「祖型」とは供物奉獻の典礼に則した儀礼的に正しい容器の形・色であり、図像に見られるのはその理想形と考えられる。岩窟遺構の外で行われた供物奉獻祭祀で使用された土器は、長期に渡る大量生産の結果、徐々に理想形から離れていったが、同じ「祖型」を意識したものであることには変わりはない。供物奉獻に使用された土器には精粗の質の違いが指摘され、使用されるコンテキストも異なるが、どちらにも共通する供物奉獻の典礼があることを、本研究はより強調する結果となった。

## <引用文献>

- Allen, S. 2012 Dahshur: Pyramid Ware. In R. Schestl and A. Seiler (eds.), Handbook of Pottery of the Egyptian Middle Kingdom: Regional Edition, pp.185-195. Vienna, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften
- Barta, W. 1963 Die altägyptische Opferliste von der Frühzeit bis zur griechischrömischen Epoche. Berlin, Bruno Hessling
- 矢澤 健 2013「エジプト中王国時代のファウンデーション・デポジットのミニチュア土器について」『永遠に生きる 吉村作治先生古稀記念論文集』, pp.539-552、中央公論美術出版
- 矢澤 健 2014「エジプト中王国時代のミニチュア土器使用に見られる「単位」について」『西アジア考古学』第 15 号、pp.23-46

## 5 . 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計 8 件)

- 矢澤 健、in press、古代エジプトの供献土器に見られる精製と粗製 アブ・シール南丘陵遺跡の事例、古代、第 145 号、査読有り
- 吉村 作治、矢澤 健(他 5 名、2 番目)、2019、エジプト ダハシュール北遺跡調査報告 第 25 次調査、エジプト学研究、第 25 号、pp.3-24、査読無し、  
[http://www.egyptpro.sci.waseda.ac.jp/pdf%20files/JES25/1\\_dahshur25.pdf](http://www.egyptpro.sci.waseda.ac.jp/pdf%20files/JES25/1_dahshur25.pdf)
- Sakuji Yoshimura, Ken Yazawa(他 5 名、2 番目)、2019, Brief Report of the Excavations at Dahshur North: Twenty-Fifth Season, The Journal of SHOUHEI Egyptian Archaeological Association, Vol.7, pp.35-75, 査読無し、  
<https://egypt-archaeology.jp/pdf/JSEAA7.pdf>
- Sakuji Yoshimura, Masahiro Baba, Ken Yazawa, Richard Jaeschke, and Masayuki Uda, 2018, Intact Middle Kingdom Anthropoid Coffin of Sobekhat from Dahshur North: Discovery, Conservation and X-Ray Analysis, The Journal of Egyptian Studies, Vol. 24, pp.158-177, 査読無し、  
[http://www.egyptpro.sci.waseda.ac.jp/pdf%20files/JES24/7\\_sobekhat.pdf](http://www.egyptpro.sci.waseda.ac.jp/pdf%20files/JES24/7_sobekhat.pdf)
- Sakuji Yoshimura, Ken Yazawa(他 5 名、2 番目)、Brief Report of the Excavations at Dahshur North: Twenty-fourth Season, 2017, The Journal of SHOUHEI Egyptian Archaeological Association, Vol. 5, 2018, pp.3-37, 査読無し、  
[http://www.shk-ac.jp/img/lab/regional\\_egyptian/outcome/pdf/JSEAA5.pdf](http://www.shk-ac.jp/img/lab/regional_egyptian/outcome/pdf/JSEAA5.pdf)
- Ken Yazawa, 2017, The late Middle Kingdom shaft tombs in Dahshur North, Abusir and Saqqara in the Year 2015, pp.531-544, 査読有り
- Sakuji Yoshimura, Ken Yazawa(他 5 名、2 番目)、2016, Brief Report of the Excavations at Dahshur North: Twenty-third Season, 2015, The Journal of SHOUHEI Egyptian Archaeological Association, Vol. 3, pp.3-22, 査読無し、  
[http://www.shk-ac.jp/img/lab/regional\\_egyptian/outcome/pdf/JSEAA3.pdf](http://www.shk-ac.jp/img/lab/regional_egyptian/outcome/pdf/JSEAA3.pdf)
- 矢澤 健、吉村 作治、2016、エジプト・ダハシュール北遺跡の中王国時代のシャフト墓について：遺構の形状・規模・分布の分析、オリエント、第 58 巻第 2 号、pp.196-210、査読有り

主要なもの以外を含めた総件数：10 件

### 〔学会発表〕(計 6 件)

- 矢澤 健、吉村 作治、2019、紀元前 2 千年紀エジプトの葬制の変遷を探る ダハシュール北遺跡第 25 次調査(2018)、第 26 回西アジア発掘調査報告会
- 矢澤 健、吉村 作治、2018、エジプト・ダハシュール北遺跡の中王国時代における葬制の特質とその背景、日本オリエント学会第 60 回大会
- 矢澤 健、吉村 作治、2018、紀元前 2 千年紀エジプトの葬制の変遷を探る ダハシュール北遺跡第 24 次調査(2017)、第 25 回西アジア発掘調査報告会
- 矢澤 健、2017、ダハシュール北遺跡：最新発掘レポート、エジプト・フォーラム 26
- 矢澤 健、吉村 作治、2017、ダハシュール北遺跡の第 13 王朝、日本オリエント学会第 59 回大会
- Ken Yazawa, 2017, The late Middle Kingdom shaft tombs in Dahshur North, Second Intermediate Period Assemblages: The Building Blocks of Local Relative Sequences of Material Culture, International Round Table Vienna, June 21st / 23rd, 2017

主要なもの以外を含めた総件数：10 件

### 〔図書〕(計 0 件)

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

なし

(2)研究協力者

研究協力者氏名：吉村 作治

ローマ字氏名：(YOSHIMURA, sakuji)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。